氏　　名（本籍地）	園　田　沙弥佳（鹿児島県）		
学　位　の　種　類	博士（文学）		
報告・学位記番号	甲第405号（甲文第49号）		
学位記授与の日付	平成29年３月25日		
学位記授与の要件	本学学位規程第３条第１項該当		
学　位　論　文　題　目	インド密教の五護陀羅尼研究		
論　文　審　査　委　員	主査　教授	博士（文学）	山　口　しのぶ
	副査　教授	博士（文学）	渡　辺　章　悟
	副査　准教授	博士（文学）	岩　井　昌　悟

【論文審査】

園田沙弥佳氏の論文「インド密教の五護陀羅尼研究」は、インド初期密教の五つの陀羅尼経典である「五護陀羅尼」を取り上げ、その機能と特色を考察するとともに、後世五護陀羅尼経典が５名の女神として神格化される過程の検討を通じて、五護陀羅尼の宗教的機能の変遷について考察したものである。インド学仏教学の密教研究においては、日本にも多大な影響を与えた『大日経』や『金剛頂経』など中期密教経典が早くから研究され、またチベット、ネパール等で重要視される後期密教の研究も盛んに行われてきた。しかしながら近年では初期密教経典の研究が盛んになってきており、園田氏の本論文もそれらの研究の潮流の中に位置づけられる。

園田氏は五護陀羅尼の五つの経典のうち、特に『大寒林陀羅尼』を取り上げ、陀羅尼の機能と特色を考察した。また後世五護陀羅尼の五つの経典は、それぞれ５名の女神として神格化され観想の対象となるが、園田氏は初期密教経典の研究とともに、インド後期密教の成就法（観想法）の集成である『成就法の花環』（サーダナ・マーラー）中の五護陀羅尼成就法の記述を検討することにより、経典としての五護陀羅尼が女神として観想の対象になっていく過程で、その宗教的機能をどのように変化させたかを明らかにした。

本論文の構成は以下の通りである。

序論　　本論文の目的と方法

第１部　インド密教における五護陀羅尼の展開

第１章　『五護陀羅尼』経典の成立と特色―『大寒林陀羅尼』を中心として―

1.『五護陀羅尼』の概要

2.『大寒林陀羅尼』における諸問題
3. 考察
第２章　神格化された五護陀羅尼
1. 五護陀羅尼経典の神格化
2.『成就法の花環』*Sādhanamālā* 先行研究およびテキスト
3. 五護陀羅尼各明妃の成就法の内容構成
4. 考察
結論
第２部　『大寒林陀羅尼』および『成就法の花環』五護陀羅尼の成就法和訳
第３部　サンスクリット校訂テキスト、チベット語訳および漢訳テキスト

上記の構成にしたがい、本論文の概要を述べる。

まず「序論」においては、本論文の目的と方法が述べられる。そこにおいて園田氏は、初期仏教、大乗仏教、密教において陀羅尼経典が歴史的にどのように展開してきたかを簡潔に説明している。続けて本論文の対象である五護陀羅尼経典の初期密教期における成立と展開についても述べており、やや簡略すぎて物足りないという感は否めないが、全体としてはわかりやすい記述となっている。その後序論では先行研究を踏まえ、「五護陀羅尼経典および神格化された女神としての五護陀羅尼成就法の構造、そしてそこにあらわれる各女神の図像的特徴などから、五護陀羅尼信仰の展開の特色を明らかにする」という本論文の目的が明確に述べられている。また本論文の研究方法は、インド学仏教学においてオーソドックスなサンスクリット、チベット語を中心とした原典研究であり、園田氏は各章の考察対象と方法の記述で序論を結んでいる。

第１部「インド密教における五護陀羅尼の展開」、第１章「『五護陀羅尼』経典の成立と特色―『大寒林陀羅尼』を中心として―」において、園田氏は最初に五護陀羅尼に関する先行研究について言及した後、五護陀羅尼経典各自のサンスクリット、チベット語訳、漢訳テキストの一覧を図で示している。さらに園田氏が使用したサンスクリット写本を含む現存する五護陀羅尼経典の写本についても言及されている。

第１章では、次に五護陀羅尼の五つの経典、すなわち①『大随求陀羅尼』*Mahāpratisarā*、②『守護大千国土経』*Mahāsāhasrapramardanī*、③『孔雀王呪経』*Mahāmāyūrī*、④『大寒林陀羅尼』*Mahāsītavatī*、⑤『大護明陀羅尼』*Mahāmantrānusāriṇī* の概要が述べられる。ここではこれらの経典はいずれも除災、病気平癒、安寧、守護を目的としており、初期仏教のパリッタとの類似が指摘されている。

続く「2.『大寒林陀羅尼』における諸問題」では、５つの陀羅尼経典のうち『大寒林陀羅尼』に含まれる問題点について考察がなされている。『大寒林陀羅尼』にはサンスクリッ

ト、チベット語、漢訳テキストがあるが、従来２種の異なった内容を持つテキストが両方とも『大寒林陀羅尼』であると見做されてきた。園田氏はその２種のテキストを『大寒林陀羅尼』A 本（ŚV-A 本）、『大寒林陀羅尼』B 本（ŚV-B 本）と名付け、五護陀羅尼への組み入れられ方、内容等の検討を行った。

本陀羅尼には、まず経題に関する問題点がある。本論文によれば、ŚV-A 本の経題はサンスクリットで *Mahāsītavatī*（『大寒林』の意）、漢訳では『大寒林聖難拏陀羅尼経』であるが、チベット語テキストでは *Phags pa pe con chen po zhes bya ba'i gzung'*（『聖持大杖陀羅尼』）と呼ばれ、内容は同じであるが経題が異なる。また ŚV-B 本はチベット語テキストにのみ残され、その経題は *'bSil ba'i tshal chen po'i mdo'*（『大寒林経』の意）である。

また五護陀羅尼として５つの経典が一つのグループとなった場合、インド、ネパールにおいては『大寒林陀羅尼』ŚV-A 本が五護陀羅尼のグループに組み込まれ、チベットにおいては ŚV-B 本が５つの陀羅尼のグループ（チベットでは「五大陀羅尼」と呼ばれる）に含まれるという。このように２種のテキストが存在し、それぞれが異なった経題を持ち、さらに ŚV-A 本、ŚV-B 本が別個に五つの陀羅尼に組み込まれている事実を踏まえ、園田氏は ŚV-A 本、ŚV-B 本の２種の陀羅尼の内容を詳細に比較検討している。

本論文によれば、ŚV-A 本、ŚV-B 本とも大寒林（屍林）において説かれていること、「結呪作法」（陀羅尼経典を身体に結び付ける行為）、「頭破作七部」（害をなす者の頭が七つに裂けること）等の記述が共通している。しかしながら、上記以外には ŚV-A 本、ŚV-B 本は経典全体の長さも大幅に異なり、また内容も異なっている。例えば ŚV-A 本における主要な登場人物ラーフラが B 本には全く登場しない。ŚV-B 本では代わりに四天王が登場し自身の「大寒林陀羅尼」を述べる。すると釈尊はそれよりも優れた「大寒林陀羅尼」を説き、四天王を恐縮させるといった場面が中心となっている。また人々に災いをもたらし、陀羅尼で取り除かれる存在についても、ŚV-A 本ではトラ、フクロウ、豹などの実在の動物であり、ŚV-B 本ではグフヤカ、プータナ、スカンダ等の悪鬼や伝染病と大きく違っている。

以上の ŚV-A、ŚV-B 両本の比較検討から、第１章「3. 考察」において、園田氏は「ŚV-A 本、ŚV-B 本は双方とも『大寒林陀羅尼』とされる経典だが、その内容の隔たりは大きい。少なくとも、分量の多い ŚV-B 本が広本、ŚV-A 本が略本という関係とは言えないだろう」と述べている。また園田氏は、チベットで９世紀前半頃に編纂された仏典目録『デンカルマ目録』に所収の五大陀羅尼の中の『大寒林陀羅尼』は ŚV-B 本であり、今一つの９世紀の『パンタンマ目録』にも ŚV-B 本が所収されている可能性を指摘している。さらに園田氏は考察の最後に、「おそらくインドでは『大寒林陀羅尼』ŚV-A 本、ŚV-B 本の原型が存在し、インド、チベットにおいて別個に発展していったと推測される。そのうち、ŚV-A 本はネパールなどのサンスクリット写本や漢訳において『大寒林陀羅尼』として残されたが、チベット語訳では五護陀羅尼（五大陀羅尼）のグループには入らず、別名『聖

持大杖陀羅尼』が与えられた」と述べている。

密教研究において経典の諸系統の考察や経典伝播の状況を考察することは重要であるが、以上の園田氏の２種のテキスト比較とそこから導き出された考察内容は、それらの研究に対して貴重な材料を提供するものである。従来の研究でも２つの異なった内容を持つ経典が『大寒林陀羅尼』と呼ばれてきたことは指摘されているが、この２本のテキストの具体的な相違に着目し、詳細に検討した研究者は園田氏以前はいなかった。園田氏の本研究は、従来の密教経典研究に新しい知見をもたらしたという点で大いに評価できる。

本論文の第２章「神格化された五護陀羅尼」においては、園田氏は経典としての五護陀羅尼が後世５名の女神として神格化され成就法の対象となる過程について、11～12世紀のインド後期密教期に編纂された『成就法の花環』中の五護陀羅尼の成就法の記述内容を中心に述べている。

第２章「1. 五護陀羅尼経典の神格化」では、『八千頌般若経』等大乗仏教の経典の神格化から、密教経典である五護陀羅尼の神格化までの流れが簡潔に述べられている。また「2.『成就法の花環』*Sādhanamālā*　先行研究およびテキスト」においては、考察対象となる『成就法の花環』に関する先行研究とサンスクリット校訂本、写本、チベット訳テキストの紹介がなされている。本節では多くの先行研究が紹介されているものの、各先行研究が具体的に何を明らかにしているのかの言及が少なく、そのため園田氏が先行研究を踏まえて新しく何を明らかにしているのかがやや不明確である。

続く「3. 五護陀羅尼各明妃の成就法の内容構成」では、『成就法の花環』中の No.194～201、および No.206の９つの五護陀羅尼成就法の概要が示されている。No.194～200は五名の女神の各１尊を観想し、No.201、206では５名の女神全ての観想が行われる。各々の説明は明瞭で理解しやすい。

本章のまとめである「4. 考察」においては、『成就法の花環』における五護陀羅尼諸尊の成就法の特色が述べられている。そこにおいて園田氏は、準備、供養、主尊の観想、四梵住と空性の観想等、複数の五護陀羅尼成就法に共通する一連の観想のパターンについて言及した後、成就法の核心部分である修行者と尊格の合一を述べた箇所に着目し、合一の形態について考察している。特に No.195のテキストでは行者と女神の合一の場面で *praveśayet*（「［尊格を行者の内に］引き入れるべきである」の意）という一般的な表現ではなく、*adhiṭiṣṭhet*（園田氏は「留まらせるべきである」と訳す）の語を使っており、陀羅尼経典が元来持つ守護的な局面が、成就法の場面でも強く表されている可能性を指摘している。また園田氏は、『成就法の花環』No.206において、観想したマンダラと合一した行者が一切衆生のために実際にマンダラを描く場面を取り上げ、同様の場面を述べた中期密教の成就法文献と比較検討を行い、行者とマンダラとの関係やマンダラが使用される目的の相違についても丁寧に考察している。いっぽう五護陀羅尼女神の図像的な特徴につい

ても言及がなされているが、経典の性格が女神の図像に及ぼした影響についての言及はやや不十分と思われる。

第１部「結論」においては、第１部の考察のまとめ、および陀羅尼経典の神格化にともなう、五護陀羅尼の宗教的機能の変遷について園田氏の見解が述べられている。園田氏は「当初、初期密教における陀羅尼経典は、経典を読誦、保持することによって除毒や雨乞い、病気の治癒等、主に自己の現世利益や除災を得るために唱えられていた。それが『成就法の花環』が編纂された後期密教の時代になると、行者は尊格と一体化し、自身が尊格となって他者を救済する機能があらわれるようになった。『自己』から『他者』へ、その救済の目的および対象が、元来持っていた五護陀羅尼経典から五護陀羅尼の女尊へと展開した際に付加したと思われる」と結んでおり、これは妥当な結論と思われる。

本論文の第２部「『大寒林陀羅尼』および『成就法の花環』五護陀羅尼の成就法和訳」において園田氏は、『大寒林陀羅尼』ŚV-A 本、ŚV-B 本の２つのテキストについては、1937年に出版されたサンスクリット校訂本、４本のサンスクリット写本２本、漢訳１本のテキストを対照しながら和訳を行った。また『成就法の花環』中の本論文で研究対象となった９本の五護陀羅尼の成就法については、1968年刊行のサンスクリット校訂本、４本のサンスクリット写本、各々のテキストに対応するチベット語訳を参照して和訳を行った。軽微な翻訳ミス等も散見されるが、全体としては経典や成就法の構造が理解しやすい和訳となっている。

第３部「サンスクリット校訂テキスト、チベット語訳および漢訳テキスト」では、和訳した『大寒林陀羅尼』と『成就法の花環』の上記のサンスクリット・テキスト、同写本、チベット語訳を対照しながら、園田氏の新たなサンスクリット校訂テキストを作成した。和訳は当然ながら本邦初訳であり、テキスト校訂についても先行する校訂本で校訂者が参照しなかった写本を用いてサンスクリット・テキストを再構築しており、以上の第２部、第３部はインド学仏教学分野に貢献できる貴重な基礎研究と言うことができる。

【審査結果】

以上本論文の概略を述べてきたが、園田氏の研究の特色は、文献和訳、テキスト校訂という文献学の基礎研究を踏まえ、さらに従来の密教研究で充分に為されてこなかった「経典の神格化にともなう宗教的機能の変遷」を「初期密教から後期密教へ」という通時的な視点で捉えるという点にある。オーソドックスな研究手法を取りながらも、独自の視点を持った本論文は、文学研究科（インド哲学仏教学専攻）の博士学位基準に照らしても、充分に妥当性を持った研究と認められる。

以上の理由から、本審査委員会は全員一致をもって、園田沙弥佳氏の審査学位論文を博士学位を授与するに相応しいものと判断する。